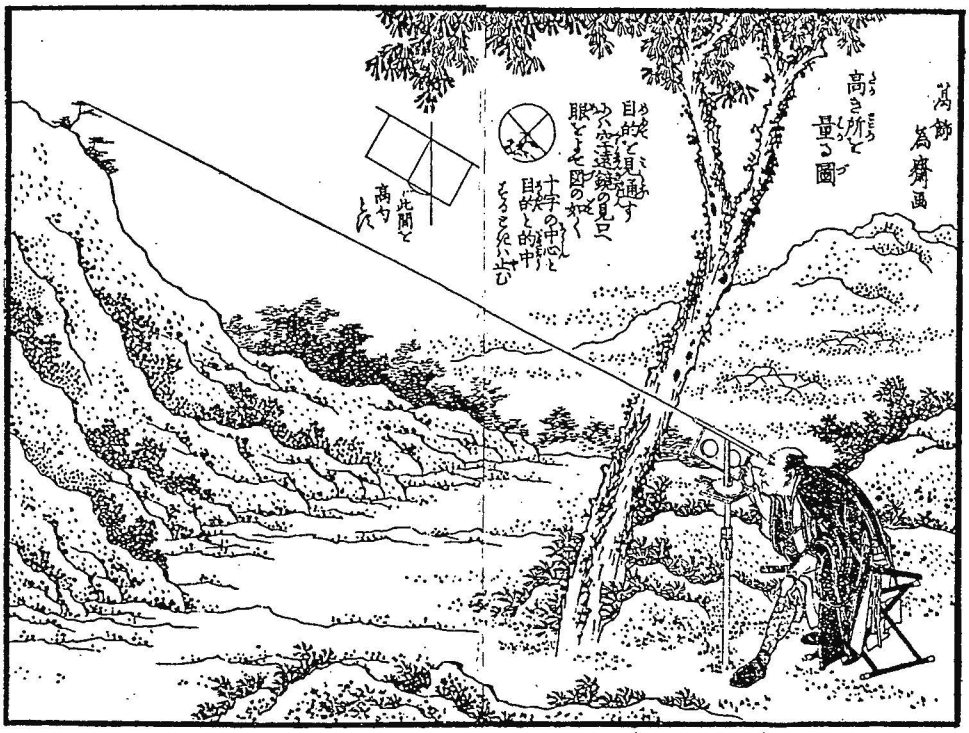
会　報

第３号



甲斐廣永編『量地圖説巻上』 嘉永5年(1852)

京都大学地理学談話会

1992

会社勤務３０年

前田毅彦（S35卒）

最近は老いも若きも海外旅行熱が盛んですが、私も昨年9月に初めてのヨーロッパ旅行を敢行しました。それまでに台湾、フィリピン及びカナダ、ハワイへと２度の渡航経験はありますが、いずれも業務上の招待旅行であり、自分で計画手配しての旅行は今回が初めてでした。自費で行くのならまずヨーロッパと決めていましたが、曲がりなりにも地理学を専攻した者にとっては行きたい所は多く、それに反して休暇は最大に引き延ばしても18日間がやっとで、行き先を絞るのに最も苦心しました。学生時代からのあこがれの地、例えばハイデルベルク、ライン河、ウィーン、ザルツブルク、チロル地方、スイスアルプス等々、どれも割愛するのは心残りで、結果的にドイツ語圏を中心に駆け足で廻ることになってしまいました。準備に際しては教室及び京大合唱団の浮田先輩ご夫妻の豊富な旅行経験にもとづく助言をいただき、お陰でなんとか見通しを立てることができて有難いことでした。海外は全く初めてで不安がる妻を同行しての鉄道中心のフリー旅行でしたが、終わってみれば印象深い思い出の地がいっぱいで、早や再訪の思いを募らせているこの頃です。

この旅行を思い立ったのは、私の勤務先、(株)博報堂では勤続30年に達すると10日の休暇を別枠でとれることになっており、この機を逃すと在職中はとてもヨーロッパまで足を延ばすことは無理だろうと思われたので、思いきって行動を起こした次第ですが、昭和35年卒業後、地理学とは余り関係のない分野で仕事をして30年も経つと学問的な面は心ならずも疎くなってしまいました。新入時総務課に配属され業務に就いてみると、学生時代、これはやりたくないと思っていた法律、簿記、そろばんといったものが必要になったのは皮肉なことでした。会社というものは専門をいかすという考え方は殆どしてくれないもので、今度は営業をやれとか、次はラジオだテレビスポットだと転々として再び総務課に戻り、今はまた別の部署を回っている内に早くも30年が過ぎたというところです。

最近は教職以外に民間企業（それもジャーナリズム関連以外の企業）へ進む方もかなり増えて来ているようですが、学生の面接を初めとする採用業務に、かつて10年余り携わった経験から言えば、広告会社は昨今ＣＭを筆頭に何かと世間の話題になることが多く、花形産業と見られ、中でも電通、博報堂は多くの学生のあこがれの的の１つであることは間違いなさそうです。確かに自分の作った広告作品が新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等によって日本国中に行き渡るということがあれば、まさに仕事の面での得意絶頂というところかも知れません。それにどうしても派手な要素のある業界でもあり、輝いて見える面もあるのでしょう。しかし内部でみていると、プロ野球のスター選手のように１人の力で勝敗が左右されるようなことよりも、多くのメンバーの地道で熱心な協同作業により得意先が獲得でき、広告作品が生み出されるという方が正しいでしょう。

本当は教職に就きたかったものが（今でも１度は教師をしてみたいと思っていますが）結果的に広告会社へ入ってしまったのですが、思い出せば、勤務時間や休暇の点で、自由な学生生活から見ると監獄にでもはいるような覚悟をしたものでした。それはやがて慣れてきますが、それよりも、仕事は誰のためにしてどう役立っているのか、そしてそれはどう評価されるのかという点に常に引っかかってきました。自分の関心領域に従って仕事ができるはずもなく、利益追求のためにやるべきことをやるまでで、いかにつまらない仕事でも完結させねばなりません。またどれだけ中身の濃い仕事をしていても、最後に売上伝票につながらなければ意味がないという世界です。どちらかといえばロマンチストが多い文学部の出身者に本当に向いているのだろうかと疑問に思うことがよくあります。後輩の学生の方もやがて就職を考えるわけですが、文学部の学生は一流有名企業への就職のステップとして入学してきた人は少ないと思います。在学中に考えが変わって民間企業へでもということも多いかと思いますが、それはそれでやむを得ません。そうと決めたら法経顔負けの熱意を持って、通り一遍ではない企業研究と準備活動に真剣に取り組む必要があると思います。最近の採用方法はどの企業もまず面接ありきで、第一関門は初対面で15分前後の面接で次に進めるかどうかが決まってしまいますから、短時間にいかに良い印象を与えるかがポイントです。おとなしく応答して先方の判断を待つという受身一方ではなく、自分は大学生活をどう有意義に送ってきたか、そこで培われたものは何か、それが目指す企業でどう生かせてどういう仕事をしたいのかという点を具体的に熱意を込めてアピールすれば、少なくとも第一関門で追い返される羽目にはならないでしょう。私の経験からしても、知的にバイタリティにあふれた人が欲しいといつも思いながら面接に当たったものでした。ともあれ

学生時代は地理学を通して勉強の仕方を学び、卒業後は全く別な分野で思い切り活躍されるのは、地理学をもう少し広く世間に認識してもらうことにも貢献できて誠に結構なことだと思います。

近頃は余暇の過ごし方が論じられますが、会社勤務の場合は、余暇の確保のためには仕事と休日の週単位のサイクルと休暇を効率よく組み合わせることがいつも問題です。そうした年3～4回の2～3泊の旅も日常の仕事からのこよなき気分転換になります。また私は在学中から合唱活動を続けてきて、今も毎週歌い指揮することは、仕事を終えてから打ち込める貴重な場であり、生き甲斐ともなっています。まさに継続は力なりで、これらを支えにして仕事もまずは定年までひと頑張りしたいものと思っています。

講演会報告

1991年11月8日、秋季懇親会に伴う行事として、会員による講演会を文学部博物館において開催致しました。当初予定されていた内田秀雄先生に代わって織田武雄先生が「石橋五郎先生の思い出」を、研究成果として博士課程3回生の山近博義氏が「近世京都の寺社地に関する一考察」を発表されました。当日の録音テープをもとに講演内容を抄録致します。

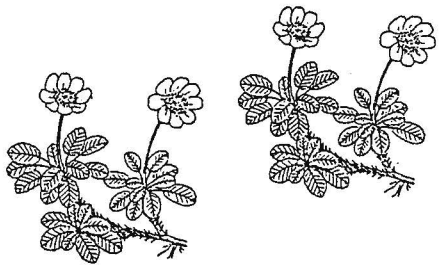
＜ 石橋五郎先生の思い出 ＞

織田武雄（S7卒）

地理の教室が始まったのは明治40年です。最初の卒業生が寺田貞次先生で、明治43年。高松高商の教授だった。それから小川先生がおいでになった。その頃までは地理ってものは、地理局とか何とか内務省に地図をつくるところはあったんですが、いわゆる地理学ってものは大学には全然なかった。京大が最初だったわけです。小川先生もだいたい地質屋でありました。小川先生は田辺の家の漢学者の家で非常に漢文の名人であって、理学関係の方ですけど文科関係のいろんな方ともお知り合いがあって、多分この史学科を創設された内田銀蔵先生ともお友達であった。内田銀蔵先生が「歴史をやるには地理が必要である.」というようなことから、これはフランスの方の影響であったと思いますが、小川先生を呼んでこられて創設されました。しかし、小川先生、留学されましたんで石橋先生がおいでになりました。石橋先生は神戸高商で、今の神戸大学の前身ですが、経済地理をやっておられて、その頃は経済地理なんてなくって商業地理という名前でやっておられたんですが、地理はもちろんやっておられません。東大の西洋史を出られまして、そしてドイツへ行かれましてシュミットヘンナーなんかと一緒でヘットナーの門下に入ってたのかもしれませんが、主にラッツェルをやっておいでになりました。こっちへ帰って来られまして、小川先生が海外留学に、というよりいろんな資料を集めに行かれたんだと思いますが、それから小川先生が教授で石橋先生が助教授。石橋先生は神戸と兼任でこちらへ来ておられたようであります。まもなく地質ができまして、小川先生が向こうへ替わられまして、石橋先生が教授になられた。

私は小川先生には受けておりませんのですが、石橋先生は非常に聡明な先生だった。しかし胸を悪くされていた。このごろはもう胸が悪いなんてことは全然ないですけれども、我々の時代はツベルクローゼってのは非常に盛んで、我々と同じ高等学校の仲間でも三分の一くらいは早く亡くなってしまった。絶えず遊ばんで不健康な生活する関係もあるかもしれませんが、だいたい少し胸の悪いような人は頭が非常にいい人が多いですね。そういう意味で石橋先生は非常に聡明な先生だったですが、非常に身体が弱かった。ものをほとんど書くことが少なかったようでありますが、最初の『史林』に日本のジパングのことを書いておられる。これは桑原隲蔵先生なんかも大変感心された論文で、おそらく東大の西洋史の時からやられたものだったと思います。その後、神戸では武庫川の集落の問題のものを書かれたこともあったと思います。そのあと京大に来られました。

石橋先生がよう休むからというんで私は地理に入ったんですが、入りました頃は石橋先生健康でございました。そして小川先生が退官されまして、石橋先生は退官論文集に九州の人口地図のことをお書きになりました。これは私、非常に優れた論文だと思います。特に、国東半島、あれは開析の火山でありまして、ずっと円状に集落が並んでます。

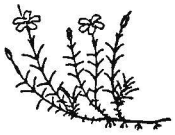


そういうものを図形化すれば、今のいわゆるセントラルシステム、中心理論なんかのむしろ先駆けみたいなことを既に書いておられるような気もするんでありまして。しかし石橋先生は書いたものが非常に少ないんで、どうも地理の教室では石橋先生のことは知られないんで。

石橋先生の演習はいつも演習室で、私を入れたら6人だったと思いますが、必ず外国書で、英語はいけない、ドイツ語かフランス語か、そのほかの言葉の雑誌を読んでくるようにということで雑誌を読んでいった。私は"Geographische Zeitschrift"のイタリーの島のことかなんか書いて発表したことがあります。論文のページ数も必ず先生見られるんですね。初め持って来いと、そしてページ数が短いとこれは駄目だと言うて、なるべくページ数の多いものをそれを要約して発表する。そしておまえの意見を最後に述べよというのがだいたいのやり方でした。石橋先生身体が弱いものですから、ふーとその間に寝られるんで、これはええと思ってごまかすと、ちゃんと起きておられまして最後に突っ込まれるんでありまして。非常にはっきりした講義をやられました。私らのときは割合にお元気でしたんですが。石橋先生の講義はラッツェルのAnthropogeographieと Politische Geographie、ああいったものを中心にしてやられたんですが、政治地理、人口地理、集落地理、それともう一つ経済地理、経済地理の方はラッツェルよりも先生ご自身がやられたのがだいぶありましたが、この四つの講義をだいたい毎年普通講義でやられる。まあ4年毎におんなじ講義をやられます。なぜ3年じゃないかというと、誰か一人落第して4年おるとおんなし講義を聞かさなならんので。それでも全くおんなし講義ではないんで、その間にペーターマンス・ミッタイルンゲンとかなんかに出たものをちょっちょっとノートの横のなんかに、紙を一杯貼ってあるんですね。講義の途中に紙を平げてはこう、やっていかれる。話は非常に明晰でした。先生、大変にご立派な先生でして、ここに油絵の肖像画があると思いますが、おそらく京都大学の文学部の先生では一番美男子だったと思います。お嬢さんはミス神戸になったくらいですから。講義の内容は先生が辞められた後、別技君と共著で本を出すつもりだったんですが、やはり病気で後は止める、おまえの名前で出せということで、別技君がそれを要約しまして。『人文地理概説』そういったものを出されました。また先生は人口地理がお好きで、小野鉄二先生と一緒に日本の人口地図を出されたこともありました。

石橋先生の考えというのはやはり、内田君の言うように、環境論ということが中心であったということは事実であったのであります。ラッツェルの考えというものはやはり彼自身が環境的なものから入っていったもので、非常に優れたもので、石橋先生は伏見先生と一緒に、僕の入る前にハンチントンの"The Principles of Human Geography"ですか、あれを『人文地理学概論』として出された。ハンチントン自身が気候学者であり、気候の変遷によって文明が盛衰するというようなことを書いているようなんで、先生はハンチントンをその点で非常にお好きであって、伏見先生と一緒に共訳で出されたわけです。ハンチントンのものなんかを僕らが読んでみても、多少環境論に対して機械論的であるというような意味で「こんなん気候でって。つまらん」というような。これは当時唯物史観がはやり始めたこともあったかもしれません。しかしハンチントンのこの考えというのは、例えばトインビーの"A Study of History"の中の、自然に対するチャレンジというもの、自然が強くなると遊牧民が衰えるとかいう考えのように非常に環境論的なものもあり、ハンチントンの影響を非常に受けて彼も書いております。そういう意味で環境論というのはやはり見直す必要があるんじゃないかと思うんですが。

ただ私は、学生時代から多少そういうものに対して疑問を感じまして。石橋先生から地理のことについて書けといわれて、レポートというよりは代筆みたいなものですが、私が卒業してから地理学講座の『人文地理学概説』として出されまして、あれは半分以上私が書いて石橋先生が直されたのですが、その時環境のことを書くときに、どうも環境をそのまま書くのはあんまり素朴なような感じがしまして、いわゆる機械論的、素朴論的な唯物論と言われたその環境論と私はそう感じまして、それで私はその頃はやりました唯物史観のうちの環境論批判を書いていって、怒られはしませんでしたけど修正されたことは覚えております。戦後になりまして、環境論をやろうと思いましたけど、どうもやりにくい。なぜかと申しますと、地政学が、ラッツェルの Politische Geographie から Geopolitik にいったもの、要するにあれはやはり環境論から出ておりますし、そういうものをもう一度やるということは多少形を変えていてもやりにくかったし、地理もそんなに勉強してなかっ



た。そこへもってきて飯塚さんが『地理学批判』を出して、ラッツエルを批判して環境論というものをぼろくそに書かれました。そういうのが非常に若い人たちの歓迎を受けました。そこへもってきてぼそぼそと私がいまさら環境論を言うわけにはいかんと思うんで。その点は内田君から、もっと言うべきだったのにおまえは遠慮し過ぎたと言われたんでありますが。実際それはやりにくかったし、私自身やや、やはり飯塚さんほどではなかったですが疑問を持っていたという点もあったかもしれません。

しかし今、環境論というのは非常にまた復活してきました。今は私地理の本なんてほとんど目が悪くって見えませんけれども、例えば安田さんとか鈴木秀夫さん、みな環境論をやっておられます。そして地球環境というような問題、これは学際的な問題であり全体的な問題ですが、やはり地理というものは非常に大きくこの中から出ていかなくてはならない。そうすると地理学にはもちろんいろんな方法がありまして、計量地理学とか、記号論とかそういった新しい方向もありますけど、石橋先生が唱えられました環境地理というものをもう一遍見直しまして、そういったことをやっていく必要があるんではないかと思うんであります。

＜　近世京都の寺社地に関する一考察　＞

山近博義（S58卒）

地理学では近世の都市研究は城下町プラン、特に武家地区や町屋地区の研究が主になっていて、寺社地が取り上げられることはあまりなかったと思われます。私の最近の関心は、寺社地を都市の中にどの様に位置づけられるかということで、特に市街地形成との関わりで寺社地を考えていきたいと思います。

近世都市における寺社地のありかたですが、『都名所図絵』（安永9＝1780）などでは、諸堂宇のほか空閑地が見られます。そこは、時間や季節とともにさまざまに機能を変化させる場所でした。信仰の対象としての機能のほか、芸能の興業や市、年中行事、そして遊覧地としての機能も持っていたのではないかと考えています。さらに平沼淑郎氏が戦前指摘されたように、寺社は市街地形成に関わる可能性をもち、その背景として財政的な問題が存在するのではないでしょうか。以上を前提に、近世の京都を対象として、寺社境内の町場化についてみていきたいと思います。

近世後期の京都における寺社地は、寺町や寺之内の寺院街に集中しており、それは狭義の境内・境内周辺を含めた広義の境内・寺社領から構成されていて、公的な年貢と課役の免除を受ける一方で売買と質入れが禁止される場所でした。今後は、塀で囲まれた狭義の境内に限定して寺社地という言葉を使っていきますが、そこが町場化し、市街地形成に関わっていたと私は考えています。

主に京都府所蔵の明治初年の寺社関係資料によって具体的にみていくと、寺社境内の町場化としては、境内の一部が貸地になり借家人が建物を建設した場合と寺社自らが借家を建設した場合があります。初めの方が数が多いのですが、居住機能を伴わない、営業用の簡易建築物である日小屋が目につきます。その際に境内を囲んでいた塀の一部が取り壊されたりすることもあったようです。貸地期間は年限を設けていましたが、それは奉行所への届出により更新可能で、町場化が継続していたことも多かったようです。

それでは境内を町場化することは、寺社にとってどのような意味をもっていたのでしょうか。まず財政自助のためという理由があげられます。これは特に、火災や地震による罹災後の再建・修復のために資金が必要なときに行われたようで、天明8年の大火で焼け再建された寺町六角下ルの誠心院などがその例です。また元治元年の兵火も町場化の大きな契機となりました。これ以外にも、他の領主の年貢地になっている場合は年貢上納などのための寺社財政自除、あるいは隣接町の住民の要望により貸地をしたこともありました。前者の例としては仁和寺街道千本西入ルの国生寺、後者の例としては五条下寺町の本覚寺があります。これらのことから、寺社地には借地人などの需要があったということがわかります。

町場化がみられる寺社の性格ですが、宗派別に町場化が見られる寺院を分類すると、浄土宗と時宗が特に多く、財産規模別では、寺社領や末寺末社をさほど持たない、つまり財政基盤の強固ではない寺社が多いようです。そして分布としては、寺町、特に三条以南の寺町にまとまってみられます。

以上は町場化として貸地のことを述べたのですが、次に興業地化の実態についてふれたいと思います。これは三条と四条間の寺町に顕著に集中しています。18世紀までの寺社境内での興業は、法会や神事などの年中行事にともなう臨時の興業が主で、長期間にわたる場合でも、仮設性が大きな特徴でした。それに対して19世紀の寺社境内での歌舞伎や人形浄瑠璃などの演劇類の興行は、長期化し固定化し

てきたのが特徴です。例えば稲葉薬師境内では高頻度で興行が行われ、四条道場では若手の修業の場として「中ウ芝居」興行が固定化して興行されるようになりました。このように、19世紀段階では「寺町」の興行地化は進行し、四条道場や誓願寺には芝居小屋や茶屋などの付属施設が設置されていました。そのほか、化政期から明治初年にかけて、境内には寄席・楊弓射場・精進料理屋などの店舗が立ち並ぶようになっていました。四条道場の場合、資料上では享保年間以降、貸地に隣接地の町人が建物を建設するということがみられ、借地人側の需要があったわけです。このように、三条、四条、鴨東という立地条件に恵まれた寺社境内は、京都の周辺部で拡大しつつあった遊興の場所へ興行地化という形を通じて明確な形で組み込まれていったのです。以上、寺町の事例は町場化が娯楽の場となっていった例です。

最後に寺社領開発が新市街地開発にどのように関わったか、寺社というものを市街地拡大の点で無視できないと思います。境内の町場化もそれに関係してきますし、それ以外にも寺社領の開発もみられます。寺町の形成は京都の近世都市化の大きな事件でしたが、町場化を通してどんどん変容していった過程でもありました。当初町屋地区から峻別されていた寺町が、町屋によって段々侵食されていった過程でもあるかと思っています。

以上、最近やっていることを少し述べさせていただきました。

関東支部例会報告

浅井得一（S11卒）

平成3年度は、6月9日（日）に、四谷「随園菜館」で地理学談話会関東支部例会及び新入部員歓迎会を開きました。当日は数名の出席者から、今どういう研究をやっているかという趣旨で、研究の要旨をコピーしたものをもとに、やや討議に近いものになりました。これからもこのようなことも続けていきたいと思っています。

関東支部の会計の残金は全くありません。得一・辰郎の両名はすでに八十歳に近い高齢にて、健康もすぐれているとはいえず、このような仕事は、来年度からもっと若い人たちにやっていただきたいと思っていますので、何分よろしくお願いいたします。

研究室のページ

本年度は11名の学部新専攻生、1名の修士課程入学生を迎えました。

新専攻生自己紹介

学部新専攻生

《　足利亮太郎　》

はじめまして。私ははるばる1時間かけて大津市から通っています。車でぶらっと出かけるのが好きです。その延長で地理学教室に来ましたが、そんなに甘くないなあ、と実感しています。そんなわけで… 皆さん、宜しくお願いします。

《　板倉小太郎　》　だいたい仮面Ｊｒ.

おととしは？「薬学部です」去年は？「休学です」今年は？「文学部です」国籍は？「ジャパーンです」出身は？「神戸シティーです」生まれたのは？「44年です。昭和です」歳は？「20代です。だいたいです」大学での目標は？「在学です。卒業です」… 将来の目標は？「国際連合。こ・く・さ・い・れんごう。タイムです。引き上げです」

《　太田隆文　》

私の出身地、大阪府池田市の五月山には大文字があり、（如意ケ岳のものよりは随分小さいですが）、毎年八月二十四日には火が灯ります。私はこれら以外に大文字を見たことがないのですが、他にもあるのかどうか調べてみるのも面白いかもしれません。

《　川添和明　》

船が陸から離れていく瞬間、階段を登りきってスタジアムの全景が目に入ってくる瞬間、北の原野の草と草の間で息をする瞬間、周りの人も物も眼に入らずに歌っている瞬間、地図からまだ見ぬ土地を想像する瞬間。幸せを感じるのはこんなとき。

《　合屋有希　》

滋賀県の膳所高校出身です。割と引越しをする機会が多かったので、あちこちに住んでいますが、一番長い期間住んでいるのは、滋賀県といえるでしょう。地理に関しては、今のところ幅の広い勉強ができたらいいなと思っています。

《　曽田菜穂美　》

旭川で生まれて、枚方で育ちました。ものごころついてからはずっと大阪なのですが、北海道出身といった方が納得してもらえることが多いです。皆の、大阪人に対する思

いこみに、驚かされています。

《 近田知子 》

同志社国際高校の出身です。が、一般生ですので語学には苦労しています。奈良・学園前から片道2時間かけて通学しています。絵をかくのが好きで、休みの日になると、レポートが出ていても予習がたまっていても、絵を描いています。

《 水野真彦 》

大阪府枚方市で生まれ、小学校の時4年間静岡に留学？し、現在は京都府八幡市に住んでいます。趣味は、街を歩いて本屋を見てまわることと、競馬です。最近は特に競馬の血統を研究するのに凝っています。

《 宮原耕一 》

広島市の瀬野で生まれ育ちました。瀬野は峠下の小さな町で、昔は駅に機関車がたくさんありました。出身校は修道高校で今年創立267年になる由緒ある学校です。江戸期に浅野藩の藩校として創設されたそうです.「道を修るをもって教えと為す」という中庸の言葉からこの名前があります。

《 森口弘美 》

「東の野にかぎろひの立つ見えてかえりみすれば月かたぶきぬ」と人麻呂が詠んだ地で生まれ、大和三山の麓の学校に通っていました。いつも歴史を身近に感じて育ったせいか、京都の町にはとても魅力を感じています。

《 吉野修司 》

東京の近郊、千葉県松戸市の出身です。海で泳いだり潜ったり、ギターをちょっと弾いたり、自転車に乗ってふらっとどこかへ出かけたりするのが好きです。日本の都市について学びたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

修生課程

《 ロサリア・アビラ 》

私はスペインのバルセロナ大学を卒業した後、文部省の留学生として昨年の4月に日本に来ました。東アジア特に日本の文化に興味があったので、京都で勉強をすることができてとてもラッキーです。これからの2年間は、大学院で人口移動について研究するつもりです。

卒業・修了者の進路

・昨年度の学部卒業生全9名の進路は以下のとおりです。

石村裕輔	朝日新聞社	浦田和明	三和銀行
江崎健治	NHK	大島健司	陸上自衛隊
大野　宏	朝日新聞社	渋谷良治	ダイキン工業
中藤容子	文学部聴講生	山本郷志	南日本新聞社
横田晶彦	三菱化成		

・昨年度の大学院修了者の就職先は以下のとおりです。

山近博義　奈良女子大学文学部助手（1992年4月）

１９９２年度講義題目

講義	教　授	成田孝三	人文地理学序説
〃	教　授	応地利明	地域環境学概論
＊研究	教　授	成田孝三	「世界都市」化と都市システム
＊〃	教　授	応地利明	古地図と「世界」認識
＊〃	助教授	金田章裕	景観認識と景観形成
＊〃	東南ア研教授	高谷好一	東南アジアの景観
＊〃	教養部教授	足利健亮	歴史地理学における資料批判
＊〃	教養部教授	青木伸好	地理空間の認識方法上の諸問題
＊〃	教養部助教授	山田　誠	日本近代都市の地理的諸相
＊〃	講　師	中村尚司	地域の経済的自立
＊〃	講　師	平野昌繁	自然地理学概説
＊〃	講　師	和田　萃	万葉歌の歴史的背景（国史学・考古学と共通）
＊〃	講　師	斯波義信	中国史研究における地域分析（集中講義、東洋史学と共通）
演習Ⅰ	教　授	成田孝三	地理学研究法
〃	教　授	応地利明	〃
〃	助教授	金田章裕	〃
演習Ⅱ	教　授	成田孝三	人文地理学の諸問題
〃	教　授	応地利明	〃
〃	助教授	金田章裕	〃
講読	教　授	応地利明	フランス地理書講読
〃	講　師	松本博之	ドイツ地理書講読
＊〃	人文研助手	石川禎浩	中国書講読

実習	講師	森 三紀	地理学実習
	助手	山崎孝史	
△演習	教授	成田孝三	地域の諸問題
	教授	応地利明	
	助教授	金田章裕	

＊は大学院と共通、△は大学院のみ。

事務局から

1991年度（1991年4月～1992年3月）

地理学談話会　会計報告

【資金会計】　　単位：円

収入	年会費	151,000
	繰越金	284,321
	計	435,321
支出	運営費への振替	103,637
	郵便振替手数料	6,540
	次年度へ繰越	325,144
	計	435,321

【運営費会計】

収入	資金会計からの振替	103,637
	秋季懇親会会費	141,000
	論文発表会会費	136,000
	新入生歓迎会残金	2,400
	計	383,037
支出	秋季懇親会経費	131,260
	論文発表会経費	121,789
	会報作成費	25,198
	通信・印刷費	100,580
	その他経費	4,210
	計	383,037

お知らせ

◎　以下の会員の方々の住所が不明です。ご存じの方は地理学談話会事務局まで御一報下さい。

カッコ内は卒業年（昭和）、敬称略

生田 博文	(51)	池内麟太郎	(48)
石角 強	(45)	今井 平八	(19)
遠藤 正雄	(53)	太田 正孝	(42)
岡本 靖一	(42)	河口 隆洋	(56)
田島 渡	(23)	都子 厓	(15)
飛田 雅孝	(49)	西沢 仁晴	(49)
野田 茂生	(36)	長谷川正雄	(52)
林(東)洋子	(40)	福田 新一	(46)
松本 弘史	(58)	山口 一郎	(55)
山下 和久	(57)	山田 憲子	(40)

◎　談話会年会費 1,000円を同封の振替用紙にてお支払い下さい。

訃報

前回の「会報」発行以降、次の方々がなくなられました。つつしんで御冥福をお祈りいたします。

確認分、カッコ内は卒業年（昭和）、敬称略

野間 三郎　(11)　　松井 武敏　(8)

山澄(藤沢)芙由子 (33)

編集後記

第3号では企業で長く活躍されている前田さんに、卒業後30年間の回想や地理学教室観を書いていただきました。地理学を学んだ人たちが、その成果を学問の中だけでなく企業や社会で発展させていくことは、以前にも増して求められているのではないかと思われます。

この4月13日から6月13日まで文学部博物館において春季企画展「近世の地図と測量術」が開催されました。なかなかの好評で、閲覧者は約2,900名にのぼりました。古地図を始め、地理学研究室の知的な蓄積は非常に大きいものがあると改めて実感しています。

会報第3号は予定よりも発行が遅れ、早くから原稿を出していただいた方にはご迷惑をおかけしました。今後も会報に対するご意見や原稿などをお寄せいただければ幸いです。

（北内陽子）

会　報　第3号
発行日　1992年6月17日
発行者　地理学談話会
〒606-01
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
Tel.（075）753-2793（直通）